

▶ 資源循環への取り組み

資源の循環利用をどのように進めているのですか？

投入する資源の量から削減するリデュース、できるだけ廃棄物にならないように長く使い続けるリユース、再資源化して使うリサイクルという、より上流からの対応によって、循環型社会構築への取り組みを進めています。

資源循環への取り組み

廃棄物リサイクルの状況

鉄道事業からは、列車や駅からの一般廃棄物や、総合車両センターからの産業廃棄物など、さまざまな廃棄物が排出されます。

JR東日本が2004年度に排出した廃棄物は55万トン。このうち86%をリユース・リサイクルしました。廃棄物量は、その排出の大きな割合を占める設備工事の内容が年度ごとに異なるため、単純に比較することはできません。しかしリサイクル率については、廃棄物の種類ごとに達成目標を定め、それに向けてさまざまな取り組みを実施しています。

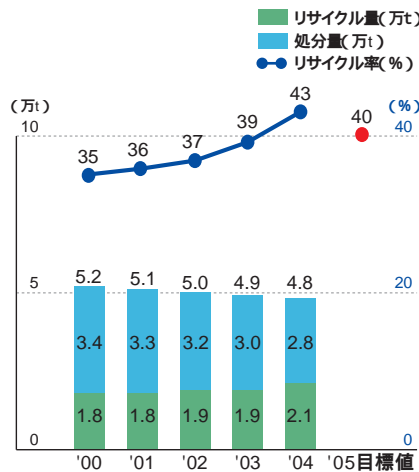
駅・列車におけるリサイクル

JR東日本を利用するお客さまは1日平均約1,600万人。駅や列車で排出されるゴミは2004年度で4.8万トンにも及びます。これは12万人が1年間に一般家庭で出すゴミの量に相当します。しかし、このなかには新聞や雑誌、空き缶などの資源ゴミも含まれているため、分別を徹底しリサイクルすることが大切です。JR東日本では、駅に分別ゴミ箱を設置するほか、収集後の分別を徹底するためにリサイクルセンターを設けています。2005年度までにリサイクル率40%の達成を目標としていますが、2004年度は43%と向上し、目標を達成しました。

リサイクルセンターの運営

駅・列車からの廃棄物が特に多い首都圏では、リサイクルセンターを設置して対応しています。(株)東日本環境アクセスが運営している施設で、上野駅と大宮、新木場の3カ所にあります。上野駅と大宮のリサイクルセンターでは2004年度、東京都内と埼玉県内から空き缶・ビン・

▶ 駅・列車のゴミの推移



ご利用しやすく安全な駅づくりと、リサイクル推進を目的に、透明ゴミ箱を設置

ペットボトル4,784トンを分別・圧縮し、再生業者に送りました。新木場のリサイクルセンターでは2004年度、集積した新聞・雑誌6,532トンを製紙工場へ送り、コピー用紙などにリサイクルしました。



上野と大宮のリサイクルセンターでは、空き缶・ビン・ペットボトルの分別と圧縮を行っています

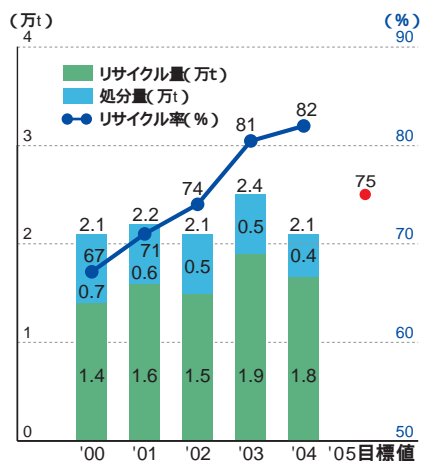
切符と定期券のリサイクル

切符の裏面には鉄粉を塗っていますが、紙と鉄粉を分離する技術により、リサイクルが可能になっています。JR東日本では回収した切符を製紙工場へ送り、2004年度には700トンの全てを、トイレトーパーや段ボール、名刺用紙にリサイクルしました。また使用済み磁気定期券については、回収した全ての磁気定期券を固形燃料として再利用しています。なお、切符や定期券の廃棄物削減につながるチケットレス化に向け、ICカード「Suica」の普及を進めており、ご利用者数は2005年7月に1,300万人を超えました。

総合車両センター等におけるリサイクル

JR東日本では、新津車両製作所で通勤・近郊型電車を製造し、そのほか総合車両センターなどで車両の整備や修繕を行っています。廃棄物の減量とリサイクルを進めるため、素材をリサイクルしやすい部材に切り替えるなど、車両設計時からライフサイクル全体を考えた対応をしています。各総合車両センターでは廃棄物を20～30種類に分別し、専門の回収業者に送るほか、鉄くずを溶解してブレーキ部品に再生したり、廃棄車輪を加工してブレーキディスク座へ再利用したりするなど、独自のリサイクルも行っています。

▶ 総合車両センター等からの廃棄物の推移

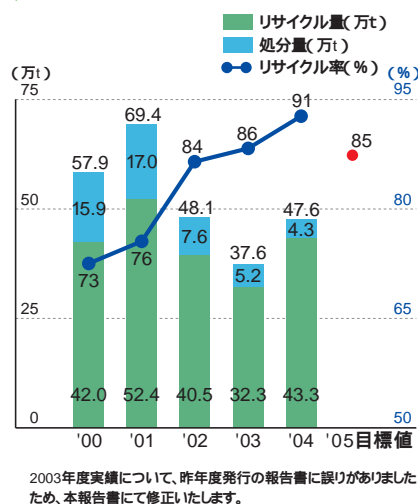


新津車両製作所。1999年に日本の鉄道会社の現業部門として初めてISO14001の認証を取得

設備工事における廃棄物削減

駅や構造物における設備工事では、受託工事¹による14万トンを含めて、2004年度には47.6万トンの廃棄物が発生しました。廃棄物処理法上は工事の請負業者が排出事業者になりますが、JR東日本も発注者として、土木工事標準仕様書などを通じて、建設副産物の適正処理や廃棄物を抑制する設計・工法を規定し、廃棄物削減に取り組んでいます。

▶ 設備工事からの廃棄物の推移



オフィスにおける取り組み

オフィスでは、さまざまな対策によりペーパーレス化を推進するとともに、廃棄物のリサイクルに取り組んでいます。分別を徹底することで、2004年度には廃棄物2,842トンのうち1,760トンを利用しました。

小売・飲食業における取り組み

駅構内や駅ビルでは、グループ会社が小売や飲食のサービスを提供しており、食品ゴミの減量やリサイクルを推進しています。

駅ビル「グランデュオ」(立川)では、生ゴミからつくった堆肥を店頭で販売しているほか、駅弁等を販売している(株)日本レストランエンタプライズでは、2004年度において食品ゴミを1,053トンの堆肥へ再生し、自社の有機リサイクル農園や契約農家で使用しました。(11ページ参照)

そこで生産した無農薬・無化学肥料野菜を、飲食店などで食材として利用する循環のしくみを構築しています。



グランデュオで販売している有機肥料は、レストランフロアから出る生ゴミをリサイクル処理したものだ

水資源の有効利用

JR東日本では1,117万トンの水資源を使用しているため、中水²の利用を積極的に進めており、雨水や手洗い水をトイレの洗浄水として再利用しています。本社ビルでは2004年度に使用した4.3万トンの水のうち、1.8万トンを利用しました。

1 受託工事：

列車の安全運行の確保などのために、JR東日本が自治体などから委託を受けて行う社外施設の工事。

2 中水：

上水と下水の中間に位置付けられる水の用途。水をリサイクルして限定した用途に利用するもの。

グリーン調達

1999年に定めた「グリーン調達ガイドライン」に基づき、資材調達の際に環境負荷が小さい製品を選ぶよう努めると同時に、再生材料の使用や廃棄物の減量化などを取引先さまに依頼しています。

2000年度からペットボトルなどの再生ポリエステル繊維を利用した制服を採用していますが、2004年度も、リニューアルした技術系社員の制服への採用を進めました。また、オフィスで使用する事務用品においては、56%の品目がグリーン購入対象物品となっており、コピー用紙も全社使用量の98%が再生紙で占められています。

さらに、2004年度からJR東日本の資材調達先となる取引先さまについて、環境およびCSRの取り組み状況を把握し、調達先選定の際の指標のひとつとしています。

駅で発生するゴミの循環利用

駅で発生するゴミを単にリサイクルするだけでなく、再び当社で活用することにより、循環の環の拡大に努めています。

切符から再生された紙は、トイレトペーパーとして、当社の首都圏の主な駅のトイレで使用するほか、社員の名刺としても使用しています。分別ゴミ箱で回収した新聞紙はコピー用紙にリサイクルし、当社のコピー用紙として使用しています。また、雑誌はコート紙にリサイクルし、新幹線車内に設置している情報誌「トランヴェール」の用紙として使用しています。



駅で集められる使用済み切符は、トイレトペーパーとして首都圏の主要駅に戻ります



使用済み切符は社員の名刺の原料としても活用しています



駅で回収した新聞紙を再生したリサイクルコピー用紙



新幹線内に配布されている情報誌にも、リサイクル紙を活用しています

リユース可能な「Suica定期券」

Suica定期券には、継続購入の際に同じ定期券の券面を書き換えて繰り返し利用できるという特徴があります。このため、Suica定期券が普及するほど、資源を節減することができます（リユース可能なSuica定期券の使い捨てを防止するため、初回購入時にデポジットをお預かりしております）。

具体的には、Suica導入前の2000年度の磁気定期券の年間発行枚数(約2,660万枚)と比較すると、2004年度の磁気定期券発行枚数は約1,500万枚減少しており、繰り返し利用可能なSuicaの特性が発揮されているものと考えられます。

